

## 『みいつけた』

畠中 恵／文 柴田 ゆう／絵  
新潮社（2006年）

うんと昔、お江戸に一太郎という五つの男の子がいました。一太郎はそれはそれは、体が弱く、寝てばかり。一太郎の両親も仕事があり、ずっと一緒にはいられないため、いつも寂しい思いをしていました。そんなある日、一太郎は天井の隅に小さな姿をした子鬼を見つけました。「しゃばけ」シリーズの主人公一太郎の子ども時代を描いた番外編。

本編でもおなじみの鳴家との出会いが描かれています。江戸の文化もわかる楽しいファンタジーです。

## 『歴史REAL 大江戸侍入門』

洋泉社（2013年）

まず、武家屋敷の屏風をカラー見開きで堪能し、目次へ。侍の仕事と実情・江戸暮らし事情・余暇と遊興・掟とタブー、といった心くすぐる特集が続きます。意外と知らない「侍」10の常識と疑問というコラムでは、武士の身分や格式、特権や給料を知ることができます。武士独自の侍言葉も気になるところです。写真が多いので目でも楽しめて、歴史小説がさらに面白くなるこの本で、サムライの素顔に触れてみてはいかがでしょうか？



## 『大江戸妖怪かわら版①』

### 『異界から落ち来る者あり 上』

香月 日輪／著 理論社（2006年）

魔都、大江戸は龍や大蝙蝠、化け狐などが棲む妖怪都市です。「大首のかわら版屋」の記者雀は、そんな世界にいるただ一人の人間です。雀にとっては妖怪たちのすべてが面白話。大江戸中、事件を追って東奔西走し、それを『大江戸妖怪かわら版』として記事にしています。代表作「妖怪アパートの幽雅な日常」の香月日輪が描く、大江戸妖怪かわら版シリーズは7巻まで出版されています。



## 『江戸時代の暮らし方』

小沢 詠美子／著 実業之日本社（2013年）

この本では、江戸時代の人々の暮らしや文化、大名や将軍のことをイラストや当時の絵などをたくさん使って紹介しています。

防災や防犯への取り組みや助け合いのしくみづくりなど、現代の私たちの生活のヒントになることも載っています。また、相撲や歌舞伎など、今も人気の娯楽の発祥もわかります。

この本を読んで、エコで豊かな生活で考えてみませんか。



## 『江戸の判じ絵』

岩崎 均史／著 小学館（2003年）

判じ絵とは、出題が絵などでされる「目で見るとは推して考える・判断する」という意味ですから、絵から推理するということになります。江戸の庶民が大いに楽しみ、頭をひねったものが多数登場します。江戸の人々のユーモアを理解し、彼らと同じように楽しんでください。

みなさんは何問解けるかな？



## 『武士の家計簿』

### 『加賀藩御算用者』の幕末維新』

磯田 道史／著 新潮社（2003年）

「金沢藩士猪山家文書」に、精巧な「家計簿」が残されていました。これほど完璧な家計簿が作れたのは、猪山家が加賀藩の「御算用者」であったからです。御算用者とは、算盤係。会計処理の専門家であり、経理のプロ。猪山家は刀ではなく、算盤をはじくことで栄転していきました。江戸時代の武士の給禄制度、武士の身分費用や親せきづきあいなど、これを読めば武士のお金の流れが見えてきます。

